

「文型」からみた講義の談話表現の輪郭

宮田 公治

1. はじめに

講義は、学生にとって身近で、社会的に重要な役割を託されている言語媒体であるが、従来、言語研究の分析対象となる機会は、文章や会話に較べると非常に限られていた⁽¹⁾。そこで本稿では、講義の談話表現の輪郭を捉える——個々の語彙や文法形式に着目するのではなく、全体的に観察する——ことを試みる。その切り口として、「文型」を用いる。「文型」とは、3節で詳しく述べるが、「機能語を軸とした文の骨組み」の「重要度順に序列化されたリスト」である。これは主として日本語教育向けに編まれたものであるが、現代日本語の主要な文法形式を網羅したリストであるため、本稿の目的に適していると考えられる。

以下、2節では、本稿が分析の枠組みとして採用する、早稲田大学日本語教育研究センターで作成された「日本語機能文型」の概要を紹介する。3節では、「文型」という概念について本稿の筆者なりの再定義を行う。4節では、14種類の講義談話を対象に行った「日本語機能文型」の頻度調査をもとに、2つの分析を試みる。具体的には、(1) 日本語教育の初級から上級までの各段階で学ぶ文型が講義ではどのような割合で現れているのかを示し、(2) 講義の「内容の切れ目」に現れる典型的な文型を抽出する。

2. 「日本語機能文型」について

「日本語機能文型」は、1999年から早稲田大学日本語教育研究センターの専任教員（川本喬、北條淳子、佐久間まゆみ）が中心になって作成してきた教材開発用の文法シラバスで、現在も使用中の教科書『日本語機能文型3～8』の柱となっている。その理念や作成の経緯は佐久間（2006）に詳述されているが、次のような特色を有するものである。

- (1) 日本語教育の学習項目として、799の文型を選定する
- (2) 全ての文型を、次の2つの分類枠に配置する
 - a. レベル…初級前半から上級後半までの8段階【表1】
 - b. 機能…大分類16・小分類99【表2】

ここでいう「機能」とは、「形式重視の「構造文型」と意味や表現意図に基づく「表現文型」を統合するべく、より総合的に、かつ、具体的に、日本語の「コミュニケーション」における文の働きをとらえようとするもの」（佐久間 2006: 5）で、実質（内容）機能・構文（文法）効能・講話（文章・談話）機能の3つを含むものである。

【表1】「日本語機能文型」のレベル別配置文型数

レベル	初級		中級				上級		合計
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	
配置文型数	120	84	86	88	100	85	123	113	799

【表2】「日本語機能文型」の機能分類表（小分類は一部のみ抜粋）と配置文型の例

機能大分類	機能小分類 (抜粋)		配置文型の例		
			初級 (①～②レベル)	中級 (③～⑥レベル)	上級 (⑦～⑧レベル)
1 場面	1.03	同時	V1ながら、V2	Sついでに、～	{Nの/V1-ル}かたわら、～ V2
	1.08	完了	Vおわる	Vきる	Vちまう
	1.12	状況		{Nの/S}場合、～	Nにあって(も/は)、～
2 範囲	2.01	限定	NだけV	N にきざって/ にかぎり 、 ～	Nを(おいて(は)、V ない/まい)
3 程度	3.01	状態	N くらい/ぐらい V	Vほど、 Ai/An/V	N1 極まるN2/極まって、V
4 並列	4.01	付加	Nも V/N/An/Ai	N1ばかりで(は)なく、N2も、 ～	N1はもとより、N2(も)～
	4.03	例示	Nなど	{Nの/V} ように、～	{N1(やN2)/S1} と/って いうふうな/いうふうに 、 ～
5 対比	5.02	比較	N1より {N2の/V/Anな/Ai ほうが Ai /An	{Sの/N} に(対し(て)/ 対する)、～	N1にひきかえ、N2は～
6 事態	6.01	変化	N1が {N2に/Anに/Ai なる	Vようになる	
	6.04	対応		{V1/Ai/An1} ば、{V2/ Ai2/An2} ほど、～	N1 に(即し(て)V/に 即したN2) ～
7 話題	7.01	提題	NはV	Nといえば、～	Nときたら、～
	7.04	引用	(Nによると、)Sそうです	Sということだ	Sとか
8 判断	8.03	推量	Sと思う	Vおそれがある	Sであろう
	8.09	当為	Vなければいけない	Vべきだ	Vざるをえない
9 表出	9.02	希望	Vたい	S1 ば/たら/と いいのに、 (S2)	Vたいものだ
	9.03	意志	V(よう)	V(よう)とする	Vまい
10 働きかけ	10.01	提案	V ましようか/ようか	V ば/たら/と いい(よ)	Vことだ
	10.04	禁止	Vてはいけない	V-ルものではない	V まじきN/まじ
	10.06	勧誘	V ましよう/よう		V (よう)ではないか/ (よ) うじゃない(か)
11 順接	11.01	因果	S1から、S2	Sだけに、～	Nからして、～
	11.05	条件	{V/Ai} ば、S	(かりに)S と したら/とすれば/と すると/とすると するな	N い かん(だ/で(は)～/ よ って(は)～
12 逆接	12.01	逆接	S1が、S2	{Nの/S} くせに、～	V つ(も)、～
	12.02	逆条件	S1 ても/でも 、S2 N/ An でも、S	S とい ても、～	{N/S1} とい えど(も)、S2
13 待遇	13.01	尊敬	V(ら)れる	Vていらっしやる	
	13.02	謙譲	Vていただく	Vております	
14 指示	14.01	現場指示	これ/それ/あれ	こ っち/そ っち/あ っち/ ど っち	
	14.02	文脈指示		こう/そう/ああ	こ ん だ け/ そ ん だ け/ あ ん だ け
15 修飾	15.02	連体節	N1というN2	SというN	SところのN
16 形式名詞	16.04	トコロ	Sところ(場所)	Sところ(性質)	
	16.05	その他		Nのほう(方向)	Nのほう(婉曲)

文型の選定および「レベル」・「機能」への配置は、長年日本語教育に携わってきた作成者の合議によって行われた。副詞・接続詞・感動詞は、一部を除き文型の対象からは除外している。なお、同一形態であっても機能が異なる場合は別文型と扱う。例えば「ながら」を含む文型は、【表3】の通り5種類を区別し、初級から上級の各レベルに配置している。

【表3】「ながら」を含む文型

文型	レベル	機能大分類	機能小分類	例文
V1ながら、V2	①	1 場面	1.03 同時	音楽を聞きながら、勉強します。
Vながら、～	④	12 逆接	12.01 逆接	体によくはないとは知っていながら、どうしてもたばこがやめられない。
{Aiい/N(であり)/An(であり)/V-マス}ながらも、～	⑦	12 逆接	12.01 逆接	狭いながらも楽しい我が家。
N1もさることながら、N2(も)～	⑧	4 並列	4.01 付加	親の希望もさることながら、自分もこの大学に入りたかった。
Nながらに(して)、～	⑧	6 事態	6.04 対応	生まれながらに持っている才能を大切にしなさい。

3. 「文型」とは

3.1 「文型」という用語

「文型」という用語は、国立国語研究所(1960)や林(1960)など草創期の現代語研究や、青年文化協会(1942)から筑波大学日本語教育研究会(1983)、グループジャマシイ(1998)に至る日本語教材の書名に見られるが、現代では、日本語学・日本語教育のいずれの分野でも、あまり積極的には使われていないようである。

「文型は、学問的要請によるよりも、教育上の実用的要請によって求められて来た」(林四郎執筆「文型」『国語学大辞典』1981年)ため、文法研究者は「構文」という用語は使っても、教育向けというニュアンスを伴う「文型」を使うことは少ない⁽²⁾。例えば、2014年に刊行された『日本語文法事典』には「文型」という項目は存在しない。

一方、日本語教師・日本語教育研究者にとっては、指示対象が不明確である(活用や助動詞類を含むか否かなど)のに加え、昔ながらの教授法として批判の対象にされがちな「文型積み上げ方式」を想起させるためか、より一般性の高い「文法項目」「文法事項」という用語が使われることが多くなっている⁽³⁾。

しかし、本稿は積極的な意義を込めて「文型」を用いることにする。すなわち、「文型」とは、次の2つの性質を兼ね備えたものとする。ちなみに、「構文」という用語は②、「文法項目」は①への意識が比較的薄いと思われる。

①「記号(形と意味・機能の結び付き)」である

②「多様な機能を満遍なく配置し、かつ重要度順に序列化したリスト」である

本節では、従来なされてきた「文型」概念への言及を参照しつつ、この2つの性質について詳しく検討する。

3.2 「記号」としての文型

「文法」は規則や制約として把握されるものだが、「文型」は、「語」と同じく、単純なパターン記憶によって成り立つものである。

文型は、具体的で、一定の状況と結びつき、それ故、それを理解するのに文法のような複雑な思考過程を必要としない。文型は、もっぱら記憶に助けられ、何回も繰り返し聴き・話すことによって、記憶に刻み込まれる。

(ザリストラ (1962)『現代言語教育方法論』、松岡 (1994) の引用による)
その言語の中で、常時、あるいは、高い頻度で使われる文型を基本文型と定め、基本文型による言い方を、くり返し練習させることによって、早く、確実に言語を習得させようとするのである。(前掲『国語学大辞典』)

「文型」は、「～てください」「～によると、～そうです」といった、機能語(助詞・助動詞類)を軸とした「形」をとり、それが〈依頼〉〈伝聞〉などの「意味・機能」と結びついたものである(以下では、「意味」「構文機能」「発話意図」などを包含した広い概念として「機能」を用いる)。この点では「水」「飲む」といった「語(内容語)」と同様である。ただし、「文型」と「語」とは、「文型」のスロット(上記の「～」)にしかるべき語をはめ込むことで文が完成する、という相補的な関係にある。

また、「文型」と「機能語」は同義でないことにも注意が必要である。「文型」は機能語そのものだけではなく、その前後に共起する内容語(の種類)も含めて指している。例えば、機能語(補助動詞)としての「～てください」を文型と捉える場合は、「～てください」の「～」の部分に(意志的な)動詞句が入ることも必ず意識される。さらに、「～によると、～そうです」のように、複数の機能語が高頻度で共起する場合は、その組み合わせが1つの文型として捉えられる。

「文型」は、ある「機能」を表す「形」が頻用されることによつてのみ認定されるものであるので、客観的な認定基準は設定しにくく、形態論的・統語論的に見て雑多なものが含まれることになる。

「沈黙は金である。」と「沈黙は金であることがある。」とは、文法的に述語をつきつめれば、「である」の「ある」と「がある」の「ある」とが相並ぶであろう。文型の記述では、「である」と「であることがある」とが並ぶのである。《中略》文法は、実現の可能性を法則としてとらえることが目的であるが、文型は、現に実現している形の中から型を抽象するので、文法より具体的となり、論理が一貫していないように見える場合もあるのである。

(林 1960: 21-22)

このような「文型」の考え方は、論理的整合性が要請される言語研究よりも、効率性が優先される言語教育になじみやすいことは明らかである。もっとも、文法を語彙と同様の単純なパターン記憶だけで習得させようというのはかなり割り切った考え方で、「文型」

は、複雑な文構造の解析や、「～のだ」「～は」など多彩で精妙な用法を持つ表現の扱いは適さないという弱点もある。

3.3 「多様な機能を満遍なく、重要度順に序列化したリスト」としての文型

言語学の用語である「構文」も、上述の「記号」としての性質を有するものである。

構文とは、個々の動詞とは独立して存在する「意味と形式の対応物」である

(ゴールドバーグ 2001: 1)

ただし、言語学者が「構文」という場合、「比較構文」「所有構文」といった具合に個別の構文に着目して観察する場合が大部分であり、ある言語にはどんな構文がどれだけあるのか、という、全体としての集合が意識されることはまれである。この点が「文型」との違いである。

文型教育というのは、現実には無限に多様な言語表現を、有限の、たとえば五〇なり一〇〇なりの「型 (パターン)」に整理し、それを通常は簡単なものから複雑なものへの順序に並べ、それぞれの型に適当な語彙をはめこみ、入れ替え、派生的に変化させたり組み合わせたりして、次第に複雑な表現に導いていく方式である。

(寺村 1989: 165-166)

「文型」は、単体ではなく集合として存在するもので、記憶可能な有限の型を抽出・選別したリストである。総数をいくつにするかは、学校英語の「5文型」から「日本語機能文型」の799(初級204、初級+中級563)、グループジャマシイ(1998)の3000まで、何を文型に含めるか、学習目標・使用目的をどこに置くかに応じて様々である。少数に設定する場合は、使用頻度や汎用性の高いものが精選され、数が多くなるにつれ、それ以外のものを重要度の高い順に付け足していくことになる。つまり、リストの内部には、重要で基本的なものからそうでないものへという、一定の序列が存在する。その際、単純な使用頻度だけでは表現できる内容に偏りが出るので、総数をいくつに設定するにしても、当該言語が有する多様な表現内容・表現場面をできるだけ満遍なくカバーしうるリストとなるような配慮が必要である。

3.4 まとめ

本稿が考える「文型」とは、次の2つの性質を持つものである。

①形と機能が結び付いて頻用される、機能語を軸とした文の骨組み

②多様な機能を満遍なくカバーできるように抽出し、重要度順に序列化したリスト

2節で紹介した「日本語機能文型」は、筆者がこのような見解を持つに至る以前から存在していたものであるが、「日本語機能文型」の799文型に付与された「機能」と「レベル」という2つのインデックスは、この①②に対応している。

4. 「日本語機能文型」による講義談話の分析

4.1 「日本語機能文型」の頻度調査

「日本語機能文型」は日本語教育のシラバスの柱とすべく編まれたものだが、現代日本語の多様な表現形式を収録したリストであり、その全てに「機能」と「レベル」という2種類のインデックスが付与されているので、ある言語作品の表現特性を探る有用な切り口にもなりうると考える。そこで、大学学部の人文学系14講義（【表4】）の談話の文字化データを対象として、「日本語機能文型」の各文型の使用頻度を計測した。この調査結果の詳細は、宮田（2014b: 74-91）に掲載した各文型の頻度表を参照されたい。

頻度調査にあたっては「最も大きな単位で文型を認定・計測する」という方針をとった。例えば、つぎの文の下線部は、

- (1) えっと、まず、あの一、そうですね、えっと、どなたか、あ、お願いしたいんですけれども、どうしましょう。(講義G, 第16文)

「Vたいんです {が/けれども}、～」(レベル:④, 機能:〈解説〉)の例としてのみ計測し、その内部に見られる「Vたい」(レベル:①, 機能:〈希望〉)、「S {のだ/んだ}」(レ

【表4】 人文学系14講義談話データの概要

	分野	講義者		教材教具		講義時間	実質時間	文字総数	総文数	1文の平均文字数
		年齢	性別							
A	文章表現論	30代	男性	プリント	板書	60分	61分	22790	418	54.5
B	文章表現論	30代	女性	プリント	板書	60分	50分	21382	473	45.2
C1	現代文学	40代	男性	プリント	Power Point	90分	81分	29898	616	48.5
C2							71分	28733	567	50.7
C3							67分	22070	422	52.3
D	応用言語学	40代	女性	プリント	板書	90分	53分	21696	566	38.3
E1	日本語学	50代	男性	プリント	教科書	90分	65分	20614	587	35.1
E2							75分	25914	694	37.3
E3							71分	25008	659	37.9
F1	発達心理学	50代	女性	教科書	OHP VTR	90分	89分	30568	784	39.0
F2							101分	35633	716	49.8
F3							101分	37970	809	46.9
G	社会言語学	40代	男性	PowerPoint		90分	96分	40904	616	66.4
H	日本語学	50代	女性	プリント	板書	90分	96分	34220	876	39.1
14講義の合計							1077分	397400	8803	45.1

ベル：②、機能：〈解説〉、「S1けれども、S2」（レベル：②、機能：〈逆接〉）は認めず、計測の対象とはしなかった。

なお、全799文型のうち、初級前半に配置された基礎的な文型のうち36文型（「N1がN2をV」「N1のN2」など）については、形態をキーとした機械的な検索・抽出が困難なうえに用例数が大量であるため、現時点では調査を保留している。また、同一形式で複数機能を持つ文型のうち、「ている」「られる」「のだ」などの頻度が膨大な9組（23文型）の機能の区別が完了していないので、これらについては、暫定的に、形式ごとの頻度を数えた。以上から、今回調査対象とできたのは749文型である。そのうち、14講義を通して1例以上採集されたものは525文型であった。

宮田（2014a）は、この調査結果をもとに、講義における文型の使用頻度を会話・文章と比較した結果、講義の使用傾向は会話よりも文章に近いこと、一部の文型は同じ講義であっても講義者によって使用頻度に大きな差が見られることなどを明らかにしている。

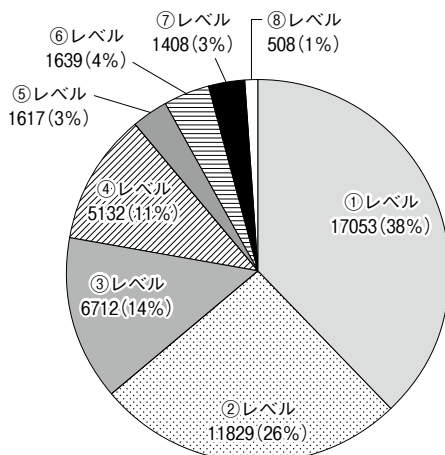
本節では、「レベル」「機能」の2つの観点から、次の2つの考察を行う。

- ・(4.2) 初級から上級の各レベルの文型は、講義にどのような割合で用いられているか
- ・(4.3) 講義の「内容の切れ目」では、どのような機能の文型が用いられやすいか

4.2 配置レベルからみた使用頻度の分布

「日本語機能文型」は、日本語教育向けに初級から上級に至る8レベルに振り分けられている。14講義における延べ頻度数のレベル別構成比を示したのが【図1】である。【表1】に示したように各レベルに配置された文型数には違いがあること、①②レベルを中心に計測を保留している文型が若干あることに留意しなければならないが、それを踏まえても、延べ使用頻度では初級文型が圧倒していることが明らかである。

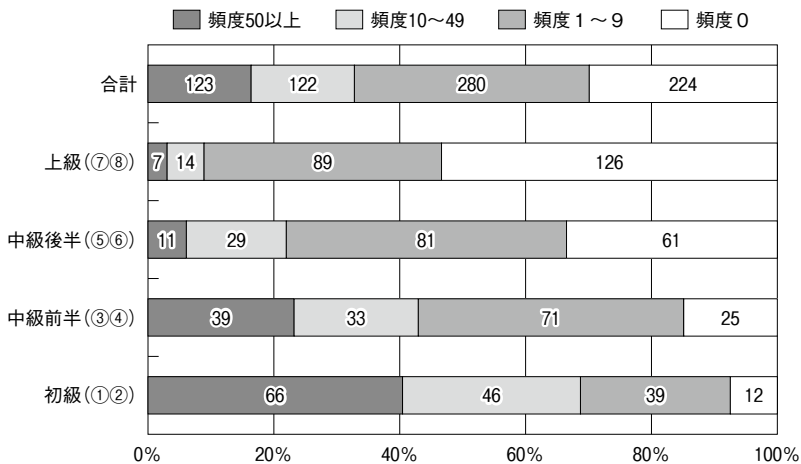
【図1】 14講義における文型の使用頻度（延べ）のレベル別構成比



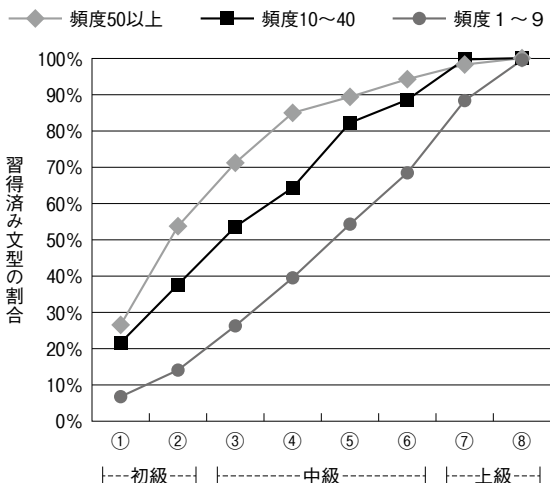
また、【図2】は全体およびレベル別に高頻度・中頻度・低頻度・頻度ゼロの文型の割合を示したもので、やはり以下の傾向が見て取れる。

- (2) a. 低いレベル（初級）に配置された文型は、高頻度で用いられるものが多い。
- b. 高いレベル（上級）に配置された文型は、低頻度もしくは頻度ゼロのものが多い。

【図2】 レベル別の使用頻度の割合（数字は文型数）



【図3】 各レベル修了時における習得済み文型の頻度別割合



【図3】は、高頻度・中頻度・低頻度の文型が、各レベルの修了時に習得済みである割合を示したものである。例えば、【図2】に示した頻度50以上の123文型のうち105文型は中級前半（④レベル）までに配置されているので、④レベル修了時には高頻度文型の約85%は習得済みとなるはずである。同様に、中級後半（⑤レベル）修了段階で中頻度（10～49）の文型の80%超が習得済みとなる。

高頻度で用いられ、かつ初級に配置されている文型の多くは、講義に限らず、あらゆるジャンル・文体で頻用される基本的な表現であると考えられる。その一方で、【表5】は上級配置であるにもかかわらず比較的頻用された文型で、講義の特徴（複雑で抽象的な内容を扱い、基本的に独話である）を表すものと言える。すなわち、〈並列〉〈事態〉〈話題〉〈順接〉などの機能を担って複雑な文を構成する文型とともに、「～ですね、（間投助詞）」「～ってのは」「～というふうに」など、話し言葉特有ながらも特定の話者や場面でのみ用いられる文型が含まれている。

【表5】 上級（⑦⑧レベル）に配置され、かつ使用頻度10以上の文型

文型番号	文 型	大分類	小分類	14講義合計	
				用例数	1万字あたり
⑦4.01.1	Vた/Nの う(で)、～	並列	付加	13	0.3
⑦4.02.4	N1/S1 どうか、 N2/S2 どうか、～	並列	列挙	106	2.7
⑦4.03.1	S という/といった ぐあい に/で ～	並列	例示	47	1.2
⑦4.03.2	N1(やN2)/S1 と/って いうふうな/いうふう に 、～	並列	例示	203	5.1
⑦6.03.2	V得る	事態	傾向	15	0.4
⑦6.12.1	N1 により～/によって～/によるN2	事態	手段	52	1.3
⑦6.12.2	Nを通し(で)、～	事態	手段	12	0.3
⑦7.01.3	Nにしても、～	話題	提題	27	0.7
⑦7.01.5	N1 をめぐって～/をめぐり～/をめぐるN2	話題	提題	24	0.6
⑧7.01.5	N/S っ(て)のは	話題	提題	51	1.3
⑧7.04.1	～というふうにV[言う、思う]	話題	引用	338	8.5
⑦8.05.1	Nっぽい	判断	比況	15	0.4
⑦8.06.1	N1/S1 というのは～、 N2の/S2 とい	判断	解説	16	0.4
⑦8.09.2	V なきゃ/なくちゃ (ならない/なんない/いけない)	判断	当為	30	0.8
⑧9.01.4	Ai/An もがある	表出	感想	41	1.0
⑦10.05.1	Vかしら	働きかけ	疑問	11	0.3
⑦10.05.2	Sんではないか	働きかけ	疑問	12	0.3
⑦10.10.1	～ですね、	働きかけ	同意	500	12.6
⑦11.01.2	S ものだから/もんだから/ものですから/もんで すから 、～	順接	因果	14	0.4
⑦11.03.1	なぜ N/Ai/An/V か という と/か といえば/ か と いったら 、(それは)Sからだ	順接	根拠	26	0.7
⑦16.05.1	Nのほう	形式名詞	その他	117	2.9

逆に、初級（①②レベル）に配置されて頻度ゼロだった文型には、「～をください」「〈疑問詞〉がいいですか」「～てくださいますか」「～てさしあげる」などの〈働きかけ〉〈待遇〉の機能に属するものが目立った。これらは対話で用いられる文型であり、講義では使う場面がほとんどないためである。

4.3 「内容の切れ目」に現れる文型

講義は、比較的明瞭な内容的構造を持った談話である。その「内容の切れ目」において、文型がどのような働きをしているかを、「機能」をキーにして分析を行う。

4.3.1 話段開始文と終了文

本稿では、講義談話の内容上のまとまりに対応する単位として、佐久間（1987: 103）が提唱した「話段」を用いる。**【表4】**の14講義のうち、A・G・Hの3講義は、談話構造の分析、すなわち「話段」の画定が完了している（この詳細は石黒（2015）を参照）。この3講義のデータに限定して、話段の開始文と終了文における文型の使用頻度を、全談話の使用頻度と対照した。「話段開始文」「話段終了文」の認定は、各話段（分量が短い開始部・終了部では2階層、長い展開部では3階層まで）の最初と最後の1文とする。それぞれの文数・文字数は**【表6】**の通りである。

【表6】 講義A・G・Hにおける話段開始文・終了文の言語量

	文数	文字数
講義A・G・Hの全談話	1911(100%)	95681(100%)
話段開始文	64(3.4%)	4649(4.9%)
話段終了文	67(3.5%)	4117(4.3%)
その他の文	1780(93.1%)	86915(90.8%)

4.3.2 機能ごとの比較

個々の文型の使用頻度を見る前に、まず機能の単位で観察する。小分類99種ごとの用例数を集計し、「全談話」「開始文」「終了文」の用例数を1万字あたりの出現数に換算して比較した。**【表7】**は以下の条件を満たす機能を抽出したものである。

- ・開始文または終了文の1万字あたりの出現数が、全談話の1.5倍以上
- ・全談話の用例数が10例以上

話段開始文・終了文に高頻度で現れる機能のうち特徴的なものを抜き出してまとめると、次のようになる。

- 開始文・終了文とも複雑な構文をとり（〈同時〉〈受身〉〈形式名詞〉）、講義者の所感を表明する（〈感想〉）
- 開始文は、受講者の前提知識に言及し（〈前提〉）、当該話段の予告を行う（〈試み〉〈希望〉）

【表7】 話段開始文・終了文での使用頻度が高い機能（小分類）

大分類	機能番号	小分類	用例数			1万字あたり出現数			全談話との比率	
			全談話	開始文	終了文	全談話 (a)	開始文 (b)	終了文 (c)	開始文 (b/a)	終了文 (c/a)
1 場面	1.01	時間	125	3	8	13.1	6.5	19.4	0.5	1.5
	1.03	同時	12	3	2	1.3	6.5	4.9	5.1	3.9
	1.07	過程	462	22	29	48.3	47.3	70.4	1.0	1.5
3 程度	3.01	状態	25	0	4	2.6	0.0	9.7	0.0	3.7
	3.02	頻度	53	6	0	5.5	12.9	0.0	2.3	0.0
6 事態	6.05	受身	164	13	12	17.1	28.0	29.1	1.6	1.7
	6.06	使役	23	0	2	2.4	0.0	4.9	0.0	2.0
	6.09	試み	38	3	2	4.0	6.5	4.9	1.6	1.2
	6.12	手段	12	0	2	1.3	0.0	4.9	0.0	3.9
7 話題	7.02	前提	383	42	12	40.0	90.3	29.1	2.3	0.7
8 判断	8.01	肯定	13	0	1	1.4	0.0	2.4	0.0	1.8
	8.03	推量	383	13	34	40.0	28.0	82.6	0.7	2.1
	8.05	比況	68	0	8	7.1	0.0	19.4	0.0	2.7
	8.07	評価	41	1	4	4.3	2.2	9.7	0.5	2.3
9 表出	9.01	感想	32	4	4	3.3	8.6	9.7	2.6	2.9
	9.02	希望	78	5	6	8.2	10.8	14.6	1.3	1.8
10 働きかけ	10.01	提案	10	0	1	1.0	0.0	2.4	0.0	2.3
	10.04	禁止	11	0	1	1.1	0.0	2.4	0.0	2.1
11 順接	11.06	否定条件	31	0	2	3.2	0.0	4.9	0.0	1.5
13 待遇	13.01	尊敬	11	1	0	1.1	2.2	0.0	1.9	0.0
	13.03	丁寧	43	4	0	4.5	8.6	0.0	1.9	0.0
15 修飾	15.01	形容	202	18	8	21.1	38.7	19.4	1.8	0.9
	15.02	連体節	166	7	17	17.3	15.1	41.3	0.9	2.4
16 形式名詞	16.01	コト	374	30	27	39.1	64.5	65.6	1.7	1.7
	16.04	トコロ	65	5	6	6.8	10.8	14.6	1.6	2.1

(C) 終了文は、それまでの講義内容を振り返り（〈時間〉〈過程〉など）、講義者の見解を提示し（〈肯定〉〈推量〉〈比況〉〈評価〉）、受講者への指示を行う（〈提案〉〈禁止〉）

4.3.3 話段開始文・終了文で用いられやすい文型

次に、個々の文型に関して、話段開始文・終了文に高頻度で出現した文型（1万字あたりの出現数が、全談話の1.5倍以上）を、それぞれ【表8】【表9】に抽出する。

4.3.2で(A)～(C)としてまとめたことを、【表8】【表9】に挙がっている具体的な文型を例示しつつ述べて直すと、話段開始文・終了文では次のような発話行為が典型的に行われていると言えるだろう。

《話段開始文》

- (1) 以前の話段（もしくは前回の講義）で述べた内容や受講者の前提知識に言及する（「Sということ」「Sが」「Sけれど」「Sように」など）
- (2) 当該話段の主題やキーワードを名詞節の形で提示する（「N1というN2」「Sということ」「Sこと」「Sところ」など）

【表8】 話段開始文での使用頻度が高い文型

文型番号	文型見出し	機能分類		用例数			1万字あたり出現数			全談話との比率	
		大分類	小分類	全談話	開始文	終了文	全談話(a)	開始文(b)	終了文(c)	開始文(b/a)	終了文(c/a)
⑥7.02.3	Sということ、	話題	前提	12	3	2	1.3	6.5	4.9	5.1	3.9
②13.03.2	Vてくれる	待遇	丁寧	13	2	0	1.4	4.3	0.0	3.2	0.0
①3.02.2	あまり/ぜんぜん Vない	程度	頻度	14	2	0	1.5	4.3	0.0	2.9	0.0
②13.03.3	Vてもらう	待遇	丁寧	16	2	0	1.7	4.3	0.0	2.6	0.0
③1.07.2	Vていく	場面	過程	58	7	8	6.1	15.1	19.4	2.5	3.2
②7.02.1	S1 けれども/けれど/けども/けど ,S2	話題	前提	263	29	4	27.5	62.4	9.7	2.3	0.4
③9.01.1	Sな(あ)	表出	感想	28	3	4	2.9	6.5	9.7	2.2	3.3
①3.02.1	いつも/ときどき/よく V	程度	頻度	39	4	0	4.1	8.6	0.0	2.1	0.0
②12.01.2	S1のに、S2	逆接	逆接	10	1	1	1.0	2.2	2.4	2.1	2.3
②1.04.2	Vておく	場面	順序	21	2	3	2.2	4.3	7.3	2.0	3.3
⑤7.02.1	Nの/S ように、～	話題	前提	21	2	0	2.2	4.3	0.0	2.0	0.0
③7.02.1	S1が、S2	話題	前提	76	7	5	7.9	15.1	12.1	1.9	1.5
②2.01.1	Nしか V/Aiく(は)/Anで(は)/Nで(は) ない	範囲	限定	11	1	0	1.1	2.2	0.0	1.9	0.0
③9.02.1	Vたいと 思う/思っている	表出	希望	22	2	4	2.3	4.3	9.7	1.9	4.2
②15.01.2	N1というN2	修飾	形容	201	18	8	21.0	38.7	19.4	1.8	0.9
④4.03.1	Nの/V ように、～	並列	例示	34	3	2	3.6	6.5	4.9	1.8	1.4
④16.01.1	Sところ	形式名詞	トコロ	60	5	6	6.3	10.8	14.6	1.7	2.3
⑥16.01.1	Sということ～	形式名詞	コト	137	11	12	14.3	23.7	29.1	1.7	2.0
③16.01.1	Sこと	形式名詞	コト	237	19	15	24.8	40.9	36.4	1.6	1.5
②8.03.1	Sかもしれない	判断	推量	50	4	2	5.2	8.6	4.9	1.6	0.9
②6.05.1	V(ら)れる	事態	受身	164	13	12	17.1	28.0	29.1	1.6	1.7
②6.09.1	Vてみる	事態	試み	38	3	2	4.0	6.5	4.9	1.6	1.2
②11.05.2	V/Ai ば、S	順接	条件	65	5	4	6.8	10.8	9.7	1.6	1.4
④10.10.1	～ね、	働きかけ	同意	54	4	1	5.6	8.6	2.4	1.5	0.4

【表9】 話段終了文での使用頻度が高い文型

文型番号	文型見出し	機能分類		用例数			1万字あたり出現数			全談話との比率	
		大分類	小分類	全談話	開始文	終了文	全談話(a)	開始文(b)	終了文(c)	開始文(b/a)	終了文(c/a)
③9.02.1	Vたいと 思う/思っている	表出	希望	22	2	4	2.3	4.3	9.7	1.9	4.2
⑦6.12.1	N1 により～/によって～/によるN2	事態	手段	11	0	2	1.1	0.0	4.9	0.0	4.2
⑥1.12.1	N1 において(は)/におけるN2 ～	場面	状況	17	1	3	1.8	2.2	7.3	1.2	4.1
⑥7.02.3	Sということ、	話題	前提	12	3	2	1.3	6.5	4.9	5.1	3.9
①9.02.3	N1はN2 が/を Vたい	表出	希望	12	0	2	1.3	0.0	4.9	0.0	3.9
②1.04.2	Vておく	場面	順序	21	2	3	2.2	4.3	7.3	2.0	3.3
③9.01.1	Sな(あ)	表出	感想	28	3	4	2.9	6.5	9.7	2.2	3.3
①8.05.1	Sようだ/ Nの/Anな ようだ	判断	比況	50	0	7	5.2	0.0	17.0	0.0	3.3
③1.07.2	Vていく	場面	過程	58	7	8	6.1	15.1	19.4	2.5	3.2
②8.03.2	Sだろう/ N/An だろう	判断	推量	66	1	9	6.9	2.2	21.9	0.3	3.2
①5.02.6	N1より N2の/V/Anな/Aiい ほうが Aiい/Anだ	対比	比較	15	1	2	1.6	2.2	4.9	1.4	3.1

③14.01.1	こなな／そんな／あんな N	指示	場面指示	43	1	5	4.5	2.2	12.1	0.5	2.7
①8.03.1	Sと思う	判断	推量	192	7	22	20.1	15.1	53.4	0.8	2.7
②1.08.4	Vてしまう	場面	完了	38	2	4	4.0	4.3	9.7	1.1	2.4
③6.01.1	Vることになる	事態	変化	38	1	4	4.0	2.2	9.7	0.5	2.4
④15.02.1	SというN	修飾	連体節	166	7	17	17.3	15.1	41.3	0.9	2.4
②12.01.2	S1のに、S2	逆接	逆接	10	1	1	1.0	2.2	2.4	2.1	2.3
②6.06.1	V(さ)せる	事態	使役	20	0	2	2.1	0.0	4.9	0.0	2.3
①11.06.1	V1ないでV2	順接	否定条件	20	0	2	2.1	0.0	4.9	0.0	2.3
③10.04.1	Vな	働きかけ	禁止	10	0	1	1.0	0.0	2.4	0.0	2.3
⑥7.01.1	N/S というとか／(っ)ていうとか、～	話題	提題	10	0	1	1.0	0.0	2.4	0.0	2.3
④16.04.1	Sところ	形式名詞	トコロ	60	5	6	6.3	10.8	14.6	1.7	2.3
③8.07.2	Vやすい	判断	評価	30	1	3	3.1	2.2	7.3	0.7	2.3
②12.01.1	S1 けれども／けれど／けども／けど 、S2	逆接	逆接	21	1	2	2.2	2.2	4.9	1.0	2.2
③6.01.2	Vようになる	事態	変化	22	1	2	2.3	2.2	4.9	0.9	2.1
②10.02.1	Vてほしい	働きかけ	要望	22	0	2	2.3	0.0	4.9	0.0	2.1
③8.07.1	Vにくい	判断	評価	11	0	1	1.1	0.0	2.4	0.0	2.1
⑥16.01.1	Sということ～	形式名詞	コト	137	11	12	14.3	23.7	29.1	1.7	2.0
⑥10.05.1	(いったい)Sのか	働きかけ	疑問	35	2	3	3.7	4.3	7.3	1.2	2.0
⑥11.01.1	N1 によってV／ によりV／ によるN2 ～	順接	因果	36	1	3	3.8	2.2	7.3	0.6	1.9
①4.03.1	Nなど	並列	例示	12	0	1	1.3	0.0	2.4	0.0	1.9
③1.07.3	Vてくる	場面	過程	124	4	10	13.0	8.6	24.3	0.7	1.9
②7.01.3	N[疑問詞] N/V/An/Ail か、～	話題	提題	63	3	5	6.6	6.5	12.1	1.0	1.8
②6.05.1	V(ら)れる	事態	受身	164	13	12	17.1	28.0	29.1	1.6	1.7
②1.01.2	S/Nの/Anな とき(に/は)、～	場面	時間	118	3	8	12.3	6.5	19.4	0.5	1.6
⑤7.01.2	S/N ということは、～	話題	提題	15	1	1	1.6	2.2	2.4	1.4	1.5
⑥7.01.2	N なんか/なんて/など 、～	話題	提題	30	0	2	3.1	0.0	4.9	0.0	1.5
④10.05.3	Sんじやないか(と思う)	働きかけ	疑問	15	0	1	1.6	0.0	2.4	0.0	1.5
①3.01.2	N くらい/ぐらい V	程度	状態	15	0	1	1.6	0.0	2.4	0.0	1.5
③7.02.1	S1が、S2	話題	前提	76	7	5	7.9	15.1	12.1	1.9	1.5
③5.01.2	N1はS1けれども、N2はS2	対比	対照	31	1	2	3.2	2.2	4.9	0.7	1.5
⑦4.02.4	N1/S1 というか、 N2/S2 というか、～	並列	列挙	47	0	3	4.9	0.0	7.3	0.0	1.5
③16.01.1	Sこと	形式名詞	コト	237	19	15	24.8	40.9	36.4	1.6	1.5
①10.03.1	Vて(も)いい	働きかけ	許可	16	0	1	1.7	0.0	2.4	0.0	1.5

(3) 当該話段における講義者の意図や所感を表明する(「Vていく」「Vておく」「Vてみる」「Sなあ」「Sたいと思う」など)

(4) 受講者に対する配慮を示して注意を引きつける(「～ね,」「Vてくれる」「Vてもらう」など)

《話段終了文》

(1) それまでの講義内容を振り返り(「Vてくる」など)、まとめる(「Sということは」「Sということ」など)

(2) 結論に至る因果関係を示す(「Nによって」「Vることになる」「Vようになる」など)

- (3) 講義者の見解を示す（「S ようだ」「S だろう」「S んじゃないか」「S と思う」など）
- (4) 次の話段（もしくは次回の講義）で扱うつもり的事项を予告する（「S たい」「S たいと思う」「V ていく」「V ておく」など）
- (5) 受講者への要望・指示を伝える（「V てほしい」「V てもいい」など）

以上から、「話段の始まり」「話段の終わり」の文は、それぞれ特徴的な複数の文型が組み合わさって構成されていることが示唆される。話段開始文・終了文の両方に高頻度で見られる「S ということで、」「V ていく」「V ておく」「S なあ」「S 1 のに、S 2」も含めて、「内容の切れ目」で用いられやすい文型を抽出・整理して学習者に提示しておくことは、接続詞の学習と同様に、講義の理解に資すると思われる。

5. おわりに

「文型」とは、もともとと言語教育向けに整理された表現のリストであるが、本稿では、「形と機能が結び付いて頻用される、文の骨組み」を「多様な機能を満遍なくカバーできるように抽出し、重要度順に序列化したリスト」と捉え、講義の談話表現の輪郭を捉えることを試みた。

14講義を対象とした「日本語機能文型」の頻度調査の結果、初級レベルの文型の使用割合が非常に高く、高頻度で用いられる文型は中級レベルまでのもので大部分がカバーでき、上級文型の半分以上は講義には現れないことが分かった。また、内容上のまとまりである話段の開始文・終了文に頻出する文型には一定のパターンがあることを明らかにした。今後も引き続き、多角的な分析を進めていきたい。

注

- (1) まとまったものとしては、石田（1993）、佐久間（2010）など。
- (2) 書名に「構文」を掲げる日本語記述文法研究会（2009）では、「述語がとる格構造」という、「構文」よりも限定された意味で「文型」を用いている。

述語にとって必須の名詞がとる格の組み合わせを文型という。《中略》文型は、述語を中心として表現される事態の類型を表す。事態の類型には対象変化型、主体移動型、対象接触型などがある。(p.12)

- (3) 例えば、庵・山内（2015）では「文法項目」という用語が使われている。また、国際交流基金（2002: 151）には次のような解説がある。

日本語教育における主な文法事項といえば、

- ・構文／文型
- ・活用
- ・助詞・助動詞・接辞など（いわゆる文法的な〈機能語〉の類）の用法

の三つをあげることができるであろう。

グループジャマシイ編著（1998）や「日本語機能文型」は、機能語の類も「文型」に含めているのに対して、上記の「文型」の指示対象は限定的である。

参考文献

- 庵功雄・山内博之編 (2015)『データに基づく文法シラバス』くろしお出版。
- 石黒圭 (2015)「3種の講義 A, G, H の表現と話段の概要」佐久間まゆみ (研究代表者)『大学学部留学生による講義理解の表現類型に関する研究 2014年度特定課題研究助成費 (A) (一般助成) 研究成果報告書』pp.21-31.
- 石田敏子編 (1993)『講義の日本語における理科系・文科系の特徴 I』筑波大学石田敏子研究室。
- グループジャマシイ編著 (1998)『教師と学習者のための 日本語文型辞典』くろしお出版。
- ゴールドバーグ, A. E. (2001)『構文文法論——英語構文への認知的アプローチ』河上誓作ほか訳, 研究社。
- 国際交流基金 (2002)『日本語能力試験出題基準 改訂版』凡人社。
- 国立国語研究所 (1960)『話しことばの文型(1)』秀英出版。
- 佐久間まゆみ (1987)「「文段」認定の一基準 (I) —— 提題表現の統括」『文藝言語研究 言語篇』11, pp.89-135.
- (研究代表者) (2006)「日本語機能文型」教材開発のための基礎的研究 早稲田大学日本語研究教育センター2005年度重点研究 研究成果報告書。
- 編著 (2010)『講義の談話の表現と理解』くろしお出版。
- (研究代表者) (2011)『日本語の「機能文型」に基づく人文学系講義の「談話型」に関する研究』2009年度早稲田大学特定課題研究助成費 (A) 研究成果報告書。
- 青年文化協会 (1942)『日本語練習用 日本語基本文型』国語文化研究所。
- 筑波大学日本語教育研究会 (1983)『日本語表現文型 中級 I・II』凡人社。
- 寺村秀夫 (1989)「構造文型と表現文型」『講座日本語と日本語教育』13, 明治書院, pp.165-180.
- 日本語記述文法研究会編 (2009)『現代日本語文法2 第3部 格と構文 第4部 ヴォイス』くろしお出版。
- 林四郎 (1960)『基本文型の研究』明治図書 (復刊, ひつじ書房2013)。
- 松岡弘 (1994)「「文型」を見直す」『言語文化』31, pp.51-74.
- 宮田公治 (2014a)「「日本語機能文型」から見た講義の談話の特性」石黒圭編『「大学学部留学生のための講義の談話に関する研究」論文集』pp.33-42.
- (2014b)「14種の講義 A～H の「日本語機能文型」」佐久間まゆみ (研究代表者)『大学学部留学生のための講義の談話に関する研究 平成23～25年度 (2011～2013年度) 科学研究費補助金基盤研究 (B) (一般) 研究成果報告書』pp.56-94.
- (2015)「3種の講義 A, G, H における「話段の切れ目」「重要情報を含む文」の頻用文型」佐久間まゆみ (研究代表者)『大学学部留学生による講義理解の表現類型に関する研究 2014年度特定課題研究助成費 (A) (一般助成) 研究成果報告書』pp.55-69.
- [付記] 本稿は、文章・談話研究会が科学研究費基盤研究 (B) (課題番号23320110)、基盤研究 (C) (課題番号23320110)、および早稲田大学特定課題研究 (A) (課題番号2014A-059) の助成を受けて作成したデータを用いた。データ作成に尽力された研究代表者の佐久間まゆみ先生をはじめとする共同研究者・研究協力者各位、有益なコメントを下された本誌査読者に御礼申し上げます。本稿の4節は日本語学会2013年度秋季大会 (静岡大学) ワークショップ「講義の談話の単位と展開」および宮田 (2014b, 2015) の一部を加筆修正したものである。